■100号記念号によせて

和紙随想

阿　部　幹　男（学芸第二課長）

ここ十数年来、早朝に起床し湯垢離をとり、古文書の翻読をしてから出勤するのが日課になっています。すがすがしい一時です。とくに、コピーや写真ではなく、直に古文書にあたるときは自然と背筋がのびます。目下、久慈市山根の旧家からでた古文書の翻読をしていますが、そのなかに「オシラ祭文」がありました。この間の朝、それを読んでいたら、馬が恋をする「姫君」を「フメギミ」と表記してありました。「Hi」を「Fi」と発音していたためです。室町時代の「天草版平家物語」を「Feike　Monogatari」と表記しているのと同じでした。近世後期の久慈市山根では「Fimegimi」と発音していたのです。つまり、「は行」は「Fa・Fi・Fu・Fe・Fo」と発音していたのです。発見・発見・大発見。それにしても、これを記した和紙と墨の偉大さにいつも感動させられます。この和紙のなかでも『枕草子』にみえるように「みちのくの紙」は昔から有名です。

昨年の暮、この「みちのくの紙」の伝統を今日につたえる白石市の遠藤まし子さんの工房を訪ねました。蔵王おろしの吹きすさぶ中、ご家族で黙々と作業をしていました。くわしくは次回報告しますが、「和紙工法でもっとも何に気を使いますか」とたずねたところ、「漉くのは誰でもできます。やはり原料の楮をしっかり育てることです」と何気なく答えられましたが、この声の響きには凛としたものがありました。遠藤さんが漉いた和紙は、そのやわらかさと保温性のよさがかわれ、東大寺二月堂の「お水取り」行事で、和尚さんたちが着る紙衣にも用いられるそうです。今年もその和紙を納めに奈良に出かけるそうです。「お水取り」は二月堂創建時から一度も絶えることなく続いてきた行事で、その行事を支える「みちのくの紙」も遠藤さんのような方々によって東北の地で営々と伝承されていたのです。

久慈市山根　オシラ祭文
（江戸時代末）

■100号記念号によせて

生態研究をするということ

藤　井　忠　志（学芸第三課長）

本州に生息するクマゲラの生態研究に携わり、既に20年以上が経過しました。中学校在職中は、毎週金曜日の午後からの課題を準備し、同僚に気を使いつつ年次休暇を行使しながら、往復700kmを移動したものです。現在の岩手県立博物館に勤務するようになり移動距離が半減しました。しかも仕事としてこれまで未知だった本州産クマゲラの生態研究に携わることができるのですから、これほどうれしいことはありません。博物館に勤務してから毎日が充実しており、ストレスがほとんどないのに感謝しています。さらに自分の調査・研究活動が、間接的ではありますが、人類に貢献できていると考えると、とてもやりがいがあります。

具体的には、本州のクマゲラが生息するブナ林内の土壌微生物が、ペニシリンのように医学に貢献でき、ひいては現在特効薬がないガンやエイズ、エボラ出血熱、さらにはSARSなどのように得体の知れないウィルスに対抗できる可能性を含んでいることです。ドイツなどでは、獣医から見はなされたブタを飼い主が不憫に思い、ブナ林内に放したところ、1年後にはみな元気に生きていた例などがあり、ブナはマザーツリーともいわれています。

次には、水の問題です。21世紀前半(2025年頃)までに淡水をめぐり、世界的な水戦争が勃発することを予想している学者もいるほどです。淡水が占める面積は、地球上の表面積の1％にもみたっていません。ところがブナ林には至るところ小さな沢が流れ、きれいで冷たい水がいつでも喉を潤してくれます。ブナの森は、水筒いらずなのです。しかもクマゲラが住む森の水は軟水といわれ、口当りがとてもよく、成分調査した結果でも他の地域の水より優れていることがわかっています。そのほかブナ林の優れた機能は、枚挙にいとまがありません。

幸い私たちが住む東北、特に北東北は伐採が進んだとはいえ、このブナ林が未だに大面積で残っています。従って、私たちはこの現在残っているブナ林をいかに保護・保全し、後世に残していくのか？という将来への責務も背負っているのです。最初はただ珍しいクマゲラみたさに始めた生態研究でしたが、クマゲラ保護には生息地であるブナ林の重要性に気づき、それがひいては人類に役立つことがわかった私ですが、後継者がいないことが現在の最大の悩みです。我こそはと思う若者の出現に期待しています！！

クマゲラが生息する白神山地のブナ林